

◎野木京子 7月

点滴を「相棒」と名づけることで
辛い時にも
仲間がいるのだと思い込む春先

広田 土（大阪府）

* ベッドでも廊下でも、点滴の棒はいつも一緒にいてくれる心強い相方。「春先」という丁寧を選んだ言葉で、希望を醸し出した。

授業中君の耳が透けていた
消えてしまう前に
つまんでしまうかもしれない

浮遊孤（福岡県）

* 片思いの詩とも読めるので切ない。「君」を正面から見ることはできないけれど、授業中なら、思う存分後ろから見つめることができる。

丸々と粒を湛えた玉蜀黍をもぐ
子供の頃故郷で聞いた
鶏の骨を折る音がした

広田 土（大阪府）

* 生と死が共存している世界で、明るくもあり、暗くもある。短い詩のなかに、怖い音が響いている。

女ひとり 一合の米を研ぐ
忘れたいことがあり過ぎて

まちりこ（埼玉県）

* お米は三合ぐらいを研ぐほうが楽しい。一合を研ぐのはどこかこころもとない感じもするが、嫌なことを忘れるために力いっぱい研ぐ。やるせない感情がほんのり伝わり、うまい詩だなと思う。

海の日の子の腕刺した海月の子

藤ほたる（神奈川県）

* 刺されたのは人間の子どもで、刺したのはクラゲの子ども。子ども対子どもという構図が楽しい。楽しい祝日に痛い思いをして可哀そうだけど、どちらも子どもだから、ほんのりおかしくて詩が成立している。

奇術師が早をびてびてと歩く

大橋 弘典（群馬県）

* 「びてびて」という不思議なオノマトペが生きている。暑さのなかを奇術師がひとり歩いていく。暑さやひでりは、奇術師のトリックで作られているのかもしれない。

前の席のおじさんの頭の上に

てんとう虫がいる

雨の日の昼間の病院行きのバス

春町 美月（大阪府）

* すぐれて映像的な詩。ピンポイントで、小さなてんとう虫に読者の視線をうまく集中させる。どんな病気で病院へ行くのだろうと、想像も膨らむ。

三途の川は

バタフライで渡ると

決めている

まちりこ（埼玉県）

*初七日に渡るものらしいけれど、供養されたり、六文銭で渡し船に乗せてもらったりという受動的な生き方（死に方？）をきっぱり拒否。最後のエネルギーを振り絞って泳いで渡る潔さが印象的でおもしろい。

猛光撃

涼し気にかわす

草木たち

桜咲（千葉県）

*太陽がきらきらしている暑い夏。「猛光撃」という造語が楽しい。

あっち？ こっち！

二人暮らしが楽しくて

すぐいっぱいになる野菜室

豊富 瑞歩（茨城県）

*新鮮な感覚が楽しい。はずんだ会話が聞こえてくるようで、野菜もきっと新鮮なのだろうなどと想像した。